

ビバハウス便り No117 新しい働き手を迎え、若者達と次のステップへ

2017年2月22日 青少年自立支援センター ビバハウス

責任者 安達 俊子

今日は2月22日。テレビでは、これを「にゃんにゃん」と読んで、「猫の日」と呼んでいるとのことでした。昨年10月17日に、それまでビバハウスができる前から一緒に暮らしてきた愛犬ビバがいなくなってしまうてからは、まさにビバハウスの「女王様」然と威厳を持って君臨している猫の「ラミ」（フランス語でお友達）にちなんだ日付で本号は発行する事にしました。

前号で今年3月まで臨時職員としてお願いする予定だった、広島から自転車で余市に来た桑田恵輔さんが下記のご本人の手記にあるような理由で、本年4月1日付けでビバハウスの正規職員として1年間働いていただける事になりました。桑田さんは私が北星余市高校で担当している総合講座『社会福祉』の協力者としても既にすばらしい働きをしてくださり、総合講座のいくつかが講師の年齢制限により、来年度から休講される中で、学校側からも是非とも講座が継続できるように後継者を求められてもいました。まさに「神は道を備えたもう！」としか思えない心境です。以下に桑田さんご自身の思いを書かせていただきました。（紙面の関係で、一部省略をしています。）

「ビバハウスのスタッフとして働かせてもらっている25歳の桑田恵輔です。北星余市高校やそこでの教育を、「実際に自分の目で見て、関わってみたい！」という思いを抱えながら、地元広島を出発し、たくさんの方々のご縁を頂いて、当初余市教育福祉村（余市ふれあい農場）で1ヶ月間農業をさせてもらいました。農業やそこで関わったの方々を通してたくさんの事を学びました。その福祉村の同じ敷地内に、青少年自立支援センター ビバハウスがあると知り、是非そこで若者と関わりたいと思い、ビバハウスを訪問しました。ビバも人手を必要としていて、とりあえず臨時スタッフとして、働かせてもらえる事に。

ビバハウスの責任者の安達俊子（元北星余市高校教諭、現同校講師）さんが、北星余市高校の総合講座の社会福祉を担当されている事もあって、毎週の講座のお手伝いをする事で、北星余市高校の生徒さん達とも関わる事が出来るようになりました。ついに僕の広島から余市への旅で求めていたものに出会えました。いろんな方々にお世話になりながら、自分の足で人生を切り開いた実感を今感じています。ビバハウスでは、ひきこもりや高校中退などさまざまなものを背負っている若者達の「今」と毎日向き合っています。ビバの若者達と関わる中で、たくさんを感じ、学びました。その中のひとつに「相手の事を理解し続ける事の大切さ」を改めて学びました。これからのビバの毎日の生活が楽しみです。」